

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会 〒136 東京都江東区 夢の島3-2 都立第五福竜丸展示館内 電話 03-3521-8494

私が中国から帰国し、新潟大学教授に赴任した直後、第五福竜丸が死の灰に被災するできごとがおこった。かつて、植物土壌系における放射能は土壌学とは無縁の存在であったが、これがフォールアウト(放射性降下物)研究のきっかけとなり、以後私のライフワークとなった。

中国との農業技術交流所感—中国の環境汚染とピナトッポ大噴火

川瀬 金次郎

私が中国から帰国し、新潟大学教授に赴任した直後、第五福竜丸が死の灰に被災するできごとがおこった。かつて、植物土壌系における放射能は土壌学とは無縁の存在であったが、これがフォールアウト(放射性降下物)研究のきっかけとなり、以後私のライフワークとなった。

(間接)採水し、ガラス電極でPHを測定した。Rain outのPHは渋谷5.1、6.0、伊東6.1、7.0、Wash outのPHは渋谷6.1、7.0、伊東6.6、7.5であった。渋谷は伊東より1.0程度酸性が強かった。伊東は海岸から六ヶ所、海煙(Sea Spray)による舞い上がりで酸性が中和されている。特筆すべき点は一九九一年六月二〇日に伊東で4.2と4.4と最高の酸性を示したが、これは六月十五日のフィリピンのピナトッポ大噴火の噴出物が原因と推定している。この噴火は死者千人、被災者一四〇万人と今世紀最大規模の被害であった。吉林省敦化に都城をおいた渤海国は九二八年に滅亡するまで二〇〇年間に日本に渤海使が34回、日本からは15回遣使された。渤海から日本へは九月下旬から三月上旬の秋冬、日本から六月八月の春夏に帰国した。「冬来夏帰」と呼んでいる。東アジアの温帯に属する日中の往来は、冬には大陸から大洋へ、夏は大洋から大陸へ季節風を利用した帆走航海による(注:上田雄、渤海国の謎)。結局冬には中国からAPが飛来し、夏には南のピナトッポから火山噴出物が飛来し、さらに中国に渡っているとされる。日中の空はボーダレス、同じ世帯の住民といっても過言ではない。次回は核実験による死の灰の影響についてふれたいと思う。

(新潟大学名誉教授・農学博士)

さまざまな分野から 見学会あいつく

六月、梅雨空のもと、展示館もしっとりした趣きです。江東区いろは婦人会、江戸川区第一かもめ福祉作業所、ポリースカウト中野支部、こども核廃下北沢の会、成田中学校PTA、松戸市東葛市民生協たんぼわたげの会、山梨県



1987年9月23日 展示館前広場で

「夢の島に第五福竜丸」と報じた白井千尋さん逝く

おそらく最も数多く第五福竜丸を訪ねたジャーナリストであった。七月一日、白井千尋さんが亡くなった。六五歳であった。白井千尋さんは、一九六〇年、「赤旗」の記者となり、以来、原水爆禁止運動を中心に日本の平和運動の一線記者として活躍した。なかでも一九六八年三月二日、

河口湖町文化協会、横浜市コープかながわ、都職労港湾支部、東京土建東ブロック主婦の会、はとバス見学会、さまざまな分野の見学会がつぎきました。港湾支部の見学会は、組合がよびかける恒例の東京湾の見学会で、今回はお母さん方とウォーターフロン計画の建設現場も周り、東京湾の平和と都民のくらしを考へ

第五福竜丸を見て 古座中学校三年 南藤小百合 「うわぁ、大きい」これが私の第一印象だった。少し古びた船体は、この船がたどってきた歴史を物語っていました。第五福竜丸は、おじいちゃんが戦争から帰ってきて責任者として初めて作った船なので思い出深いそうなんです。 おじいちゃんが、この船を作っている時は、被爆するなんて考えもしなかったと思います。だから「第五福竜丸が被爆した」という知らせを聞いた時は、信じられないくらいびびりしたそうなんです。 私は、初めて第五福竜丸を見て「おじいちゃんがこんな大きな船を作ったのか」と思い、しばらく眺めていると、被爆したのが昔のこととは思えませんでした。 最近では、だんだん戦争や核のこわさが忘れられてきているけど絶対にこんなことがあったことをわすれてはいけない、と思います。そして第五福竜丸をゴミの中から拾い出して下さった方々に対しても感謝の気持ちでいっぱいです。 私はその人たちのおかげでたくさんのお話を聞きました。第五福竜丸には、たくさんの人たちに、核のこわさと平和の素晴らしさを教えてほしいと思います。

●連載—3
放射線防護に関するロシアの「新基本原則」

森 一久

第五福竜丸の被災事件は、米ソの熾烈な水爆開発競争の最中に起きた。

スターリンの命令一下、水素爆弾でアメリカを追い越すべく、住民や周辺の安全は度外視して新式の水爆を開発し、昭和二十八年夏現カザフスタンのセミパラチンスクで核実験を行った。その後で、少なくとも次の四つの被曝事件が起きていた(ことが最近判明した)。

①核兵器工場からの高放射能廃液の公共河川への放出(一九四九—五二年、被曝者三万人)②同廃液を貯蔵に切り替えた後のタンクの化学爆発(五七年、数万人)。反体制科学者メドベージェフ博士著「ウラルの核爆発」(一九七五年)でその一部は知られていたが。③工場従業員の恒常的な大量被曝(二万人、約一〇レム/年)、④急造の実験場での核爆発による住民被曝(詳細不明だが内一万人は数年に百レム以上)。

この新型水爆が、フォールアウト

トの分析でそれまで米国が持っていたものと違う(固体の重水素化リチウムを爆薬とする)いわゆる「乾式水爆」と判明したときの米国の動揺は大きかった。そして、急遽開発された米国製乾式水爆第一号の実験が、爆発力の予測も不十分のまま強行されたため、あのビキニ事件を引き起こしたわけである。

セミパラでの核実験でも全く同様な理由で住民被害をおこしたと聞くが、真相は前記の数字子以外まったく不明。来る九月中旬、カザフスタン国放射線研究所主催の環境・放射線・人体影響に関する「科学会議」が開かれ、実験場も初公開されるという。だが回国としては、長いあいだ実験場に聖地を阻まれてきたイスラム教徒の怨念も深く、またこの被害データもロシア共和国との取引材料と考えているようで、真の住民対策はいつのことであろうか。

旧ソ連の放射線関連の事件はま

だその全部が明らかになつたわけではないが、チェルノブイリ事故もふくめこれら被害者への救済は無原則かつ無秩序であり、それがかえって混乱を増幅してきた。内外からの慈善や救済の手も同様で、真に住民の心を和ませるものは殆ど無かつたといえる。

このような状況のなかで、今年一月ロシア放射線防護科学委員会、エルツィン大統領の指示に基づき「放射能汚染地域の住民と経済活動保護のための基本文書」を作成し、大統領の承認を待っている。その内容は、チェル事故以来初めて、専門家の英知を結集して、科学的かつ冷静な対策を示したものと注目される。放射能汚染地域を四種類、①調査区域(放射能の増分が自然放射能と同程度以下)、②管理区域(①の五倍以下)、③移住検討区域(②のさらに十倍まで)、④強制移住区域(③以上即ち年五レム超)に分類し、①は対策不要、②は食料・環境の管理で住民保護は可能、③は②と同様な対策でよいが移住を望む人には政府が費用負担、④は居住禁止、経済活動・天然資源利用は特別法により制限、と規定している。そ

して「住民への勧告」の章では、その結びで次のように訴えている。「健康に最も危険なのは放射線恐怖症により過度の心理的緊張を強いられることであり、(強制移住区域を除き)汚染地域に住むすべての人々は、冷静に現状を判断し、禁煙などの節制や適切な食事等に心掛ければ、寿命や家族計画等すべてにおいて、ロシアの他の非汚染地域に劣らない充実した生活を送ることができる。」

旧ソ連邦の崩壊から生じた混乱と新国家間の責任追及の中、すでに汚染地域に対しては、無原則な、また人気取りの補償や対策が、場当たり式に取られ、それらはすでに既得権ともなっている。今ごろになってこんな「合理的な対策」を持ち出しても、実効はないとみるロシアの専門家も多い。

しかし、もしロシア政府が安定し、その政府が全面的に実態を開示し、住民との間で放射線影響について真剣に説明・対話に努めるならば、前記の「基本原則」も、汚染地域の住民の方々の心に平安をもたらす、一つの出発点になるかもしれない。 (第五福竜丸平和協会評議員)

すずさんの平和

飯塚利弘著『死の灰を越えて—久保山すずさんの道』刊行を前に

山村 茂雄

高知の農業高校で「久保山バラ」とよばれるバラが咲いています。五年前の夏「ビキニ被災船を追う高知高校生平和の旅」の二行は、第五福竜丸展示館の調査・見学につづけて焼津を訪ねました。一行は地元の高知生や中学生と一緒に「ビキニ被災を学ぶ会」を開き、ひとつのグループが久保山すずさんを訪ねて話を聞きました。感動をつつんで何通ものお礼の手紙がとどきました。高知の女生徒の手紙には、愛吉さんが丹精をこめて育てていたバラを分けていただけないかという願いが書かれていました。

翌年の三月、すずさんが挿し木で分けた四本のバラの苗木は、久保山愛吉氏墓前祭に参加した高知高校生ゼミナールの顧問教師に託されて高知にわたり、真紅と薄いピンクの花を咲かせたのでした。近く刊行される飯塚利弘著『死

の灰を越えて—久保山すずさんの道』は、すずさんと高校生の交流から生まれた「久保山バラ」の話ではじめられています。



『福竜丸だより』に飯塚利弘さんが「久保山すずさんの道を執筆して」と題されて随想を書かれたのは今年二月のことでした。そのなかで飯塚さんは「結婚十一年目に『世界初の水爆犠牲者久保山愛吉氏未亡人』となり、涙の乾く間もなく原水禁運動の『時の人』として国際舞台へ。同時に三・一ビキニ水爆被災事件の政治的決着による補償金のため羨望、嫉妬の渦に巻き込まれ、茨の道を歩むことを強いられる。その中でもずつと夫の遺言を自らの信念として核兵器廃絶を訴え続ける」「すずさんの歩みをままとめたいと願っていた」と書かれています。

久保山愛吉さんが亡くなったと

き、すずさんは三十三歳でした。聞き書きのかたちで書かれるこの本の中心はもちろん「事件」から現在までのすずさんの日常ですが、聞き書きはまず農家の長女としての生い立ち、きびしい農作業のこと、娘時代のすずさんの生活などが、時の移り変わりを背景にして記録されていきます。この記述は後段の夫愛吉さんを奪われたあと、まったく思いもかけぬ状況のなかで生きなければならなくなる、一人の女性の歩みを読み解く鍵になっているように思います。

愛吉さんとの出会い、結婚、漁師の女房としての日々、第五福竜丸被災、乗組員の入院、そして愛吉さんの死、やがての政治的決着と補償金—この補償金が世間のそねみや、こころないいくつもの仕打ちを生んでいきます。どれほどの苦衷のなかにすずさんがおかれていくか、聞き書きは綿密です。まわりの家にテレビが入ってからとテレビを買うことにも気がつかう生活、何がすずさんをこうまで追い込んだのか、痛々しいまでに気丈に三人の子どもと生きる母親の姿がうかがえます。

「運動に利用されている」とい

う風評を耳にして疑心暗鬼になり、気持ちが悪くじけそうなきなど、すずさんは愛吉さんの夢を見ました。夢の中で愛吉さんの助言を聞き、励ましを求めたのです。そうあったであろう夫婦仲の良さが、愛吉さん亡き後もよりそってつづいているようです。そしてその対話のいちばんの支えは愛吉さんが死の床で遺した「原水爆の被害はわたしを最後に」の願いを引き継ぐことであるにちがいないと思います。

引用されている集会での発言や手記、巻末のメッセージを順を追って読んでいくと、この三九年間、夫の遺志を信念として生きたすずさんの「平和」が見えてくるように思います。

いま、すずさんの日常は母となつた三人の娘さん夫婦、孫たちにかまれています。ときに訪ねてくる中学生たちに、次代を託すようにしてビキニ事件や平和の大切さを語る庭には、愛吉さんの育てた庭木が茂っています。このところすずさんの健康がすぐれないとききます。一日も早い回復を願います。 (編集者)

またこの検査は三十八年たつて初めて私に新事実を教えてくれた。肝炎の犯人は、輸血で感染するという、C型ウイルスだったのだ。輸血は被ばくして国立東京第一病院(現国立東京医療センター)に入院中、放射能で白血球や血小板が減りはじめ、生命が危ぶまれた時大量に受けている。

耳元で、肝硬変など恐ろしい言葉を聞かされながらも、片方では「ああ、よかった。商売や生活態度が原因でなくて」と安堵で胸をなでおろした。

そして、仕事もほっぽらかしに、一カ月の入院、それに続く十六週間、一日おきの注射通院が始まった。

たった二CCだが、九〇〇万単位というこのインターフェロンは、少量の割にたくさん副作用が出た。白血球や血小板の減少、三十九度をこす発熱、痛み止めの薬を併用しているのに体中のあちこちに走る神経の痛み、食欲不振、脱毛、手足の抜けるようなだるさなど、本当に不快でいやな注射だ。それでも考えてみれば私は幸せなのかもしれない。気にしていた病気の原因の一つがはつきりして、新しい治療を受けている。

*

一九九一年(平成三年)七月、私はもう世間から忘れ去られようとしているこのビキニ事件、被ばくして体験させられた私たちのつらい思いを一人でも多くの人に知ってもらおうと、今まで書いてきたものをまとめ、『死の灰を背負って』という題で出版した。これがきっかけとなって、翌年の四月十九日、NHKスペシャルで「又七の海 死の灰を浴びた男の三十八年」が放送された。後にその番組を見たというビキニの核実験の地、マーシャル諸島の人や、番組を担当したNHKの東野真さんたちと話す機会があった。同じ悩みを持つ被害者同士として、考えさせられることが多かった。

太平洋の真ん中にあるこのマーシャル諸島共和国は、大自然に囲まれた美しい国である。二十九の環礁、一、二二五の島からなるこの国には五万人余りの人が住み、昨春秋には国連にも加盟した。

マーシャル諸島の惨状を知ったのは、私は退院後、いや詳しく知ったの

はつい最近である。これもひどい話だ。アメリカは「人類の幸福と世界の戦争を終わらせるために」と大義名分をかかげ、島の人々も不幸にした。島民に多発している甲状腺ガンや白血病、流産、死産、奇形などは、被ばくが原因ではないかと考えられるのに、それらの人びとに詳しい説明も十分な治療も行なわれていないようだ。死産では三十三年前、私も同じようにくやししい思いをした。

*

今世紀最大の地球環境汚染といわれるこのビキニ水爆実験。当日、風向きが重視されていた。「好ましくない」という報告を受けていたにもかかわらず実験は強行された。そして多くの犠牲者が今も苦しんでいる。危険区域の指定も事件が表面化するや、あわてて六倍もの広さにした。区域内とか区域外とかいう以前の問題だ。

この地球上でこれまでに、地上と地下を合わせて一、八五二回の核実験が行なわれた。一九九一年五月に開かれた核戦争防止国際医師会議では、大気圏内にまき散らされたこの放射能の影響で二〇〇〇年までに二〇〇万人の人がガンで死亡すると推定している。

東西の卑劣な核兵器開発競争は、罪もない大量の被ばく者を生んだ。そして、莫大な資金と資源を浪費して、自国を破局にまで追い込み、ようやく目覚めるにいたった。

ソ連の崩壊、アメリカもまたしかり。本当の敵は自分のなかにあるのだということ、過去の戦争はくりかえし教えているのに。残されたこの無用の長物をこれからどうするつもりなのだろう。

無差別大量殺人核兵器、原水爆。

世界の良識ある人びとが、危険、反対とあれほど訴えたのに、こんなものを作り続けた科学者や指導者たちは厳しく(神の名において)罰せられるべきだ。

人類を破滅に導こうとした、歴史上の犯罪者として。
(おおいし・またしち 元第五福竜丸乗組員・クリーニング店経営)

●寄稿

外交文書と 第五福竜丸・ビキニ事件

大石又七

一昨年(一九九二年)十月、戦後三十年間の日米外交文書の一部が、外務省から三万ページにわたって公開された。その中にはこの第五福竜丸・ビキニ事件関係も、三千ページほど含まれていた。

じわじわとせまる死の恐怖と必死にたたかっていた私たちの外側で、事件処理に苦慮していた日米政府の意外なやりとり。とくに岡崎勝男外務大臣や井口貞夫駐米大使などがとり交わした極秘文書のかけひきは生々しい。「不法行為ではない」と突っ張るアメリカ政府、日米関係の悪化にうろたえる当時の日本政府の様子。三十七年目に公開されたこの文書は、私の中にある当時の記憶と重なり、よみがえってくる。

あのとき私は二十歳だった。
今から三十九年前の一九五四年(昭和二十九年)三月一日、アメリカは広島型原爆の一千倍といわれる、途方もなく大きな水爆実験を太平洋の真ん中、マーシャル諸島ビキニ環礁で行なった。そのときの爆発は、直径が四十キロ、吹き上げられた珊瑚礁は死の灰となって三万四千メートルの高さまで達した。

この日、ビキニの東、百七十キロ離れた公海で私たち第五福竜丸は、マグロ漁をしていた。この大量の放射能をおびた死の灰は、作業中の乗組員二十三人の上にも容赦なく降りそそいだ。そしてデッキの上にも足跡をつ

けるほど降りつもった。

放射能の影響は、その日の夕方から出た。頭痛、吐き気、下痢。二日目からは、灰の当たったところは火ぶくれになり、一週間後には髪の毛抜けはじめた。

大事件を積み込んでいるのも知らず、三月十四日、出港以来五十二日ぶりで母港焼津港に入港した第五福竜丸は、十六日の被爆ニュースで一変した。焼津の町は大混乱に陥り、放射能の恐怖は、またたく間に日本中に伝播していった。そして私たちが持ち帰った灰は、アメリカの最高機密、水爆の正体まであばいてしまったのだ。

この事件は世界中に大きな衝撃を与えた。私たち日本人の大半も真剣に核実験反対とさげんだのに、米ソ(旧ソ連)の核開発競争は、数と力の論理で実験を続け、地球上の人類を六十回も殺すほどの核兵器を作ってしまった。

*

昭和二十九年三月十七日・アジア五課。「原水爆被害処理に関する件」【極秘】

本十七日午前、アジア局長室にて、アジア一課長、欧米一課長、情文一、二課長、条約三課長、国協三課長、総務課大和田事務官及びアジア五課長参集(水産庁海洋課長出席)の上、本件処理に

関し検討せる結果、問題点等右の通りである。
一、船の位置は危険区域の外か内か。
一、船は無電機を備付けていたか。
無電機の故障の有無、無電機技手の資格、米側の警告を受信しているか。英語を解するか。

一、損害補償請求権について
請求権の有無

船が危険区域外にあった場合
米側の不法行為(過失に基づく)に対し請求できる。
危険区域内にあった場合
米側が実効的な警告措置をとっていなかった場合には同様請求

アメリカ政府も法律上の責任は最後まで認めず、逆に人道的な好意、「ほどこし」といった。これでは死んだ者や被ばくした者、また多くの被害者を被った人たちはたまったものではない。青信号の横断歩道で、信号無視の暴走車が起こした事故の様なものなのに……

こうした日米間で激しい補償問題が行なわれている水面下で、もう一つの核問題、日本への原子力技術供与、原子炉の提供(NHK調べ)が同時に進んでいたというのだから、これには驚いた。

ビキニ事件が決着するとその年、待っていたかのように、日米政府は原子力協定に調印。苦しむ被爆者の声や被害者たちの姿を覆い隠すように「原子力時代到来」と大キャンペーンを始めた。安全性や廃棄物処理など、まだ未解決の問題があるという多数の専門家たちの意見を尻目に。

そして二年後、輸入された原子炉は茨城県の東海村に原子力発電所として完成、ここを始まりに、既成事実を積み重ねながら原子力発電所は増えつづけ、やがて原子力船「むつ」の建造へと進められていった。

*

昭和二十年八月、太平洋戦争でアメリカが世界で初めて広島と長崎に落とした原子爆弾は、その殺傷力と破壊力を世界中の人びとに誇示するものだった。そしてそれはまた、いかに非人道的な兵器であるかをも認識させた。

戦後冷戦に入り、ソ連の核兵器を意欲したアメリカは、さらに強力なものをとビキニ環礁で核実験を続けた。そしてこの巨大な水爆実験は行なわれた。爆発はけたはずれだが、洋上実験だったため、広島・長崎のような残酷性は見られなかった。だがそれ以上に恐ろしい放射能の怖さを世界中の人びとが知った。爆発と同時に生まれる二十数種類もの放射性核種は、海流や気流に乗って地球全体に広がり、長いものになると半減するのに何十年もかかるという。その間人間はもちろん、生物すべてに悪い影響を与えていく。

被ばくした私たち第五福竜丸乗組員も、二十三人のうち、これまでに三分の一にあたる八人の仲間が、四十代、五十代という働き盛りの年齢で死んでいった。

その仲間たちの死因は、同じようになんと肝臓障害である。この事実に対して、まわりの見解もなげかまちはまちだ。それぞれの人が自分の立場、都合でものをいっているところがあつて、いまだに真相ははつきりしない。

「偶然だ。酒のせいだ。いや生活のみだれだ。もう事件とは関係ない」

八人の仲間もいろいろなことをいわれて、病気の出たものは、そのたびに小さくなつてきた。

はつきりとした答えが出ないのは、どこにでもある一般の病気であること、奥にある事件とのからみ、政治決着しているこの問題をむし返されるようなことがあつては、とそんな思いがはたらいているのかもしれない。

*

千葉市の放射線医学総合研究所で、毎年おこなっている検査を昨年(一九九二年一月)も受けた。そのとき胃に影があるといわれ、二月になつてそれを調べてもらおうと、娘が働いている近くの病院に出かけた。自覚症状があつたわけではないが、ついでにこの際、慢性肝炎も徹底的に検査を受けてみようと思入院することにした。

そして、命拾いをした。

腹腔鏡でお腹の中をのぞいた先生は私の肝臓を見ていった。

「大石さん、いいときに検査を受けましたね。あと三年で間違いなく肝硬変ですよ。注射も使えるぎりぎりのところにきています」。

二、三年前から使用されているインターフェロン。健保も適用されるようになったこの薬、効く確率は三〇から四〇パーセントといわれている。私は耳を疑った。まさかそんなことになつていようとは。

先生は続けた。

「C型ウイルス型肝炎が八割、アルコール性が二割というところかなあ。このウイルスは肝臓に一番つきやすいんです」

手術台に横たわりながら、私は崖つぶちに立たされ、足元をのぞいている思いがした。

山本忠司さんや鈴木隆さんたち、亡くなった八人はどうだったんだろう。年齢も気になった。今の私もみなと同じ五十代の後半だ。

請求権行使の方法

論理的には、政府が介入せずとも被害者が米側に訴を提起すればよい。

一、機密保持について

本件原爆被害状況等について、日本側として発表禁止等を行う法的根拠はなく、米側から協力要請があつた場合、関係機関に自発的協力を求める以外にない。

*

昭和二十九年三月十七日・在米井口大使宛・岡崎大臣発・「ビキニ環礁付近における邦人漁夫の原爆被災の件」・至急

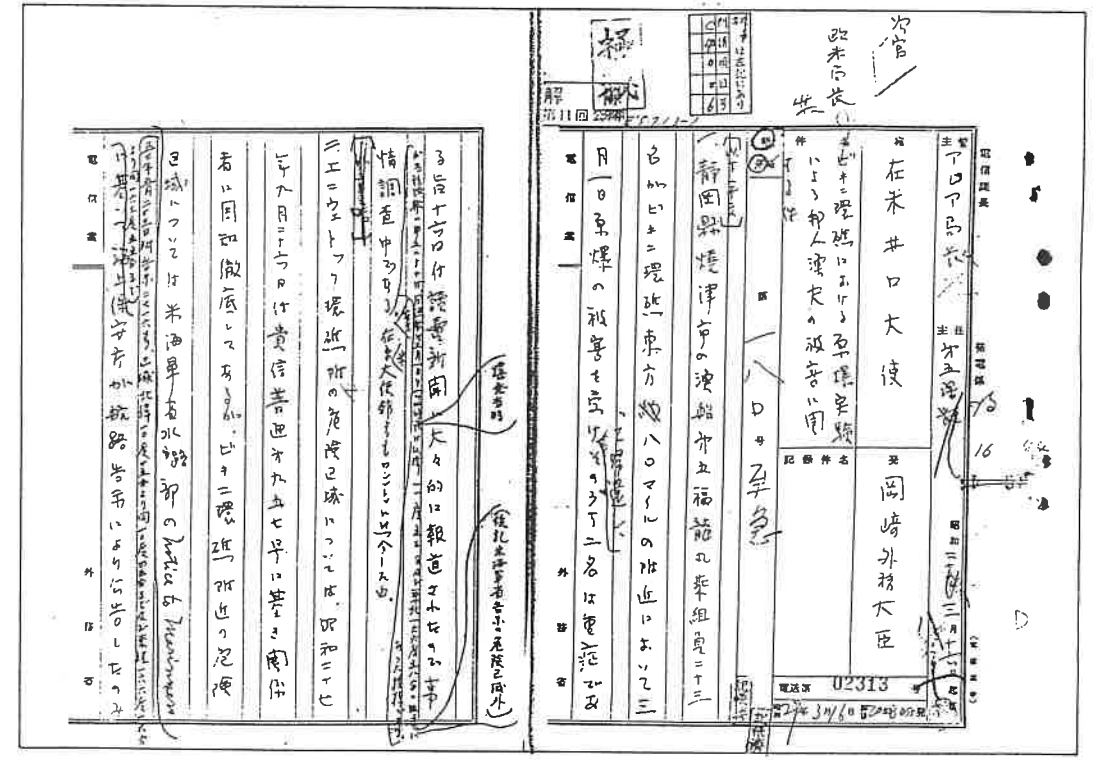
十七日午後アリソン大使次官を来訪し、ビキニ事件の被害者の治療につき申出ありたる処(一般情報参照)本件は恰好のトピックとして昨十六日以来新聞は勿論、国会に於ける質問の中心となりたる観あり、且つ左翼分子の扇動もあり放置することは、日米友好関係上面白からざるのみならず、米国の必要とするsecurity保持に対する我方の協力が遺憾の点を生ぜしむる如き空気を誘発するおそれ無しとせず。

*

私たちの取つてきたマグロは、入港の翌日三月十五日に、陸揚げして全国に送られ、一部は市販されていた。そのマグロからも放射能が検出されて家庭の台所をも直撃した。

乗組員の持ち物はすべて土に埋められ、見えない放射能の恐怖を、新聞・ラジオも連日のように伝えた。放射能という言葉すら知らなかった私は、身の回りで起きている事件がどうしても自分とは結びつかず、他人事のように思えた。だが意思とは別なところで事はどんどんすすみ、考えてもみなかった一年二ヶ月という闘病生活が、ここから始まった。

昭和二十九年三月十八日、ロスアンゼルス・法眼総領事発・岡崎……



公開された外交文書(マイクロフィルムの複写)の1頁